備中国における玄賀僧都伝説の諸相
－哲多郡の意味するもの－

原田 信之

1) 新見公立大学教育科学研究科

(2017年12月20日受理)

南都法相宗興福寺の高僧であった玄賀（七三四～八一八）は、僧中国（岡山県）に隣接し、湯川寺を建立したことが知られている。玄賀が隣接した地であるためか、備中国各地には玄賀に関する伝説が多数伝えられている。南都法相宗興福寺は、南都法相宗興福寺の高僧であった玄賀が隣接した地であるためか、備中国各地には玄賀に関する伝説が多数伝えられている。南都法相宗興福寺の高僧であった玄賀が隣接した地であるためか、備中国各地には玄賀に関する伝説が多数伝えられている。

（キーワード）玄賀、松林寺、袈裟掛岩、僧都川、哲多郡

はじめに

南都法相宗興福寺の高僧であった玄賀（七三四～八一八）は、大僧都跡を辻備中国湯川寺に隣接した。そのためか、岡山県には玄賀開基の伝承を持つ寺院が複数存在し、各地ではいまだに玄賀の伝説が生き生きと語られている。玄賀が備中国湯川寺に隣接したことについては、複数の確実な資料が残されているので玄賀とみられるが1)、備中国での玄賀の消息はよくわからない。

備中国での玄賀の動静は、文献資料にはほとんどと残されていないが、口頭伝承の世界ではまだ生き生きと語られている。筆者が岡山県各地で調査を重ねたところ、真偽は不明であるが、備中国には玄賀の生涯と伝説から終焉の地伝承までがそろっていることが判明してきた2)。備中国各地での玄賀に関する伝説は、実在はともかく、少なくとも伝承地周辺の人々に玄賀がどのようにとらえられてきたかをうかがうことができるものであり、文献資料の間隔を埋めるものとして、玄賀像の一端を語る参考資料となりうるであろう。

確実に玄賀が隣接したとみられる備中国湯川寺は、現在の行政区分では岡山県新見市山崎寺二一五番地に位置している。現在の新見市の市域内において、玄賀開基伝承を持つ寺院は湯川寺のほかに、哲多の大橋寺（新見市哲多町花木四六四九番地）、哲西の四王寺（新見市哲西町大野部一七六七番地）がある。これらの寺院は湯川寺を中心とする「玄賀隣接地伝承圈」に属すると考えてよいであろう。

備中国と玄賀の関係を考察するうえで、検討しておく必要のある大きな問題がある。それは「哲多郡」の意味である。通常、玄賀は備中国「哲多郡」湯川寺に隣接したと説明される場合が多い。しかしながら、実際には、湯川寺は備中国「哲多郡」（近世以降「阿賀郡」と表記）にある。なぜこのような説明がされるようになったのであろうか。

本稿では、備中国各地で複数存在する玄賀僧都伝承のうち、高槻市の松林寺附近や吉備中央町上竹周辺に伝承されている伝説等を検討するとともに、備中国の玄賀僧都伝承における「哲多郡」の意味するものについて考察することを目的とする。

1 高槻の松林寺と深薬寺

岡山県高槻市洛荷町一口八番地にあたる千光山松林寺は、伝承によれば、玄賀が草壁を結んで隣接したことがある地であったそうで、周辺部は「玄賀谷」と称されている（ただし、江戸期の文献では「玄賀谷」と記されていないが、土地の人は玄賀と「玄賀とだけ呼ぶことが多いそうである）。曹洞宗瑞蓮山深薬寺（岡山県高槻市洛荷町原187番地）末本は観音菩薩である。延徳二年（一四九〇）に創建され深薬寺の創建を確立したという。松林寺の入口には「玄賀旧跡地」と刻まれた石碑が立っている。

*連絡先：原田信之 新見公立大学教育科学研究科 714-8585 新見市西方1263-2
裏に「大正十四年八月建立／（略）／奥组中」とあることから、近世の奥集落の中村の人物が大正十四年に建てたものであることがわかる。かつては「松林寺緑樹」があったということなので調べてみたのが、所在不明である（過去に何度か火災にあったとかで深沢寺にも松林寺にも伝わっていないということであった）。

江戸時代末期の嘉永七年（一八五四年）に刊行された「備中国巡礼大図観」には、天領の「湯川寺」の所に「玄変僧都遺跡」と記してあるほか、「近似」の所に「備玄玄遺跡アリ／今玄谷見谷田 山ノ日々阿歌アリ」と記してある。また、この「備中国巡礼大図観」の右上に枠で囲まれている〔古利ノ名ノ所ノ」は「備玄谷 川原郡近似村」とある。この「備中国巡礼大図観」で、明確に玄寛に関するものと思われる記述はこれだけである。このことから、江戸時代末期には「湯川寺」ともに「近似」の「玄谷谷」に「山ノ日々阿歌」がよくよく知られていたらしいことかがわかる。

江戸時代末期の嘉永四年（一八四八～一八五四）に帰化されるとされる「備中国巡礼大図観」の川原郡近似の項には「玄谷谷 此等に告し玄変僧都住給ふと人々／枯木堂千光山松林寺 本尊名／境内観音堂有／（中略）／山の井／名勝考五云近似村八玄谷のしばしく住する所にて今猶其処を言伝で玄谷谷といふ／次につたへたる八国人の伝へたる歌にておのれまで虫出する書を見ず山家克の別本にゑふことを読めばどのがてる山ニナなしとそのへ西行の口つにありおもはゆるへつはしばしく愛に記すもし玄谷の歌にあらし事を知る人あはば示し給へてすと/or/山ノ日々阿くも外に丸山ハありもし我に事たる山の井の水」に記されている。この記述から、「備中国巡礼大図観」に「山ノ日々阿歌」と「備中谷」が引用されている「渓流中も外に丸山ありもし我に事たる山の井の水」とのことで、江戸時代末期には近似の「玄谷谷」は「山ノ日々阿歌」が詠まれた「名跡」として知られていたことがわかる。

大正三年に刊行された「上房郡誌」の「玄変僧都の項」の末に「昭和五年郡誌日／高梨より河を渡り南に入ること十数町、川原郡近似村に玄変谷を設しする処あり、相伝ふ高恵玄寛の世に築造せりと云う、通寺あり松林寺といふ。尼之ヲ監し、袈裟ぞねて紅顔、絹に模るも足に足る。尊を玄変僧都の木像を安ず、更た古雅なりは、虫鼠鼠飛、室の片耳一指に欠く。屋に石仏あり、即ち玄寳を誰も贅し、飲み若しく和歌を題する処として、所謂山の井の水と称するものは那木ノ井に坂あり、泉も別有に枯渇せずに溜め（父之）の古跡を今やざらか往々の如し。」（略）平成天皇が在位し、と云っても刀を極めに源氏をないしとせんと、対に江北へ来り、高麗草衣、築塀と為して渡激を操る所前数年、弘仁帝御の操行を重ねじ毎季白歩を賜ひ又所在の郡に勧して租税を免ぜしむ。弘仁九年 skulls、年八十九、松林寺其の額検の遊従なり。元厚（平定）敬書、寺鐘造霍東国高僧伝、西山漬源の詩歌あり、左に錦す／玄谷谷／（後略）」という記述がある。

この部分から、明治時代末期から大正時代初期頃の松林寺の状態が知ることが出来る。すなわち、大正時代初期頃の松林寺は古びて荒れ果てて一人の尼さんが住んでいたこと、常に玄寳僧都の木像が安置されていたが虫や鼠に釣られ、木像の片耳と一指が既に欠けていたこと、玄寛が自らがって水を飲み和歌を詠んだという山の井の水を称する泉もかつてあり、また木の葉が茂っていたこと、しまいの樹木が伐採されていたこと、この文を記した沼田顕綱氏（一八六七～一九三四）がそのさびた様子を詠んでいたこともある。で重ねて大正時代の末になって松林寺は復興されたとみられ、大正二年四月建立と記されている松林寺の入口の「玄変旧跡地」を刻まれた石碑は、復興の記念として建てられたものと推定される。

この文験で特に興味深いのは、玄寛がこの地に来て船頭として数年間渡激を操ったということ後半分の記述である。これは、玄寛が渡激をしたという有名な説（古事記や『発心集』等に所収）がこの地で取り込まれて成立した伝説だと推定される。また、「上房郡誌」のこの文章の続きに、「西山漬源の詩歌あり、左に錦す」として、備中国池口郡の松林寺に生まれた江戸中期の儒学者山川谷（一七三五～一七九八）の詩歌が数篇引用されている。「玄変谷」と題する詩の「山の井の水」や「山の井の僧都」と詠み込んだ和歌、「渡河～昔玄変所鶴舟処应」と題する漢詩などである。このことから、西山漬源も、玄寛がこの地に来て高楽川で船頭として数年間渡激を操ったと認識していたことかが考えられ、玄寛高楽川渡激伝説は、少なくとも今から二百年以上前には成立していたことがわかり著目される。

次に、土地で採集した事例を示す。

（事例）「玄寛と松林寺開山」

いつの時代か、玄変僧都のようう形状があって、そしえどの、壇がある、そういうっことを、ここに、深緑寺の、さっさしく申し上げた、開山になってから、そのおお弟子さんが、二世さんですね、深緑寺の第二世さんで、その二世さんがですね。

「そういったれの有れある壇なら、ひとつお寺として、これからも来た、曹洞宗として、深緑寺の末寺として、それ盛り立てていていしゃいらないかだろう」ということで、地域の人に話して歓って、

「あなたがしっかり頭張ってもらいたい」ということで、結局その頃から深緑寺の末寺になったんです、

ですから、まあ、あそこの松林寺という正式な名前が付いて、そしてこれ曹洞宗いう形の中で、出てくるのは、今
從六百年足らず前ですね。深堀寺の第二世、二代さんで
すね。二代さんの、まあ功績なわけですからね。

(事例１) は松林寺開山の由来についての語りである。
この地に玄寶が庵を結んで住むといった伝承があり、深
堀寺第二世善実山厳（延徳二年）が延徳二年（一四九〇）
に松林寺を開創したという。松林寺は深堀寺の末寺である
が、種類は一軒もないそうである。

(事例２)「玄寶谷」
あそこのね、まぁ結果。近似なんですよ。近似なんです
けれど、特に、あそこには、玄寶さんがおられた所という
イメージが非常に強いですからね。だから、あの、「玄
寶」いうなら、あそここの玄寶のことじゃないということ頭がみん
なるんです。だから、
「近似の、何の何丁目じゃ！」とあるの。「玄寶のどこじゃ」って言うより、「ああそうか」と。み
んなそれくらいわかります。へぇからもう、一般的には「玄
寶」玄寶ですね。

玄寶谷は恐らくね、あれは、バスの停留所の名前
のようなね。だからあそこはね、「玄寶」という本当の地
名じゃないと思う。市の方のなんたんには、番地としては玄
寶谷というのはないと思う。「玄寶」玄宝さんって言うんです。
だから、この頃ではもう、「松林寺いうたらどこなら」
言うて、「玄寶じゃ」と言うた。「ああそうか」と言う。

(事例２)は松林寺のことを土地では「玄寶」と呼称し
ているという語りである。先に引用した「国地志」に「玄
寶谷」という呼称が紹介されていることから、「玄寶谷」と
呼ばれた時期があったようであるが、現在では「玄宝」と
呼ばれているという。筆者も、周辺地で調査中、高尾市落
合町近似の「松林寺」と言っているけれどもよくわからないと一々い
られた際、「落合町近似の玄寶谷」と言えするとすく理解して
もらったことが何度かある。また、松林寺の近くに「玄
寶谷」というバス停があるが、周辺地で聞いてみても「玄
寶谷」という呼称はあまり知られてなかった。

(事例３)「玄寶土仏（伝玄寶自作）」
あそこの、戦前ですねとね、前から、あそこの、こう
いう石がね、ちょっと言い表わした石なんだですね。
それでその、仏像を、簡体に彫ったよう
な、ものがね、あの周りに出てくるね。それ
がね、玄寶僧都が、その、石像を、仏像的な石像を、ち
っかりに彫ってね、あっちこっち、埋めていくっ
て、万人の、安楽修行の、幸福を願いながら、彫って
いかれたものなんだろう、いすうざる、話が残っています。だ
んだんそういう、石が出てきているんです。それは高尾山の、
考古館か美術館かに、何度もあるはずなんだですね。
そういったような方であり、長らくここで、玄寶がですね、
倉庫で、そういう生活をするから、一般大衆の、民にささ
げた。

(事例３)は、松林寺周辺地で出土する小さい石仏は、玄
寶が万人の幸福を願いながら彫ってあちこちに埋めたも
のだと伝えられているという話である。
(事例４)では、小さな石仏と語られているが、高尾市では通常「玄寶土仏」
と称されている。近似地区で調査中、子どもの堤三参拝
くらいの土仏を拾ったという昭和二八年生まれの男性に
会った。「高尾市史」はこの「玄寶土仏」についてこの
土仏は、僧侶留営の地、草薙のあった玄寶谷と呼ぶこの
巡礼から出土していたもので、八〇年ばかり前から土地の
人々が争って発掘し、祭祀仏として所有している。伝説に
よると、後世僧侶の遺伝を営び、草薙に十三仏の土仏をつ
くり供養したとか、または玄寶僧都が近似在屋当時、付近
一帯に疫病が流行し、その退治祈願のため造仏したともい
われている。（略）作製年代は四〇〇年ないし五〇〇年前
頃と推定される」と述べている。現在では、この土仏は、
四、五百年前に、十三仏信仰が流行した頃に造られたもの
と推定されているようである。

(事例４)「玄寶剣像木像（伝玄寶自作）」
まだ、これも伝承ですよettesou。あれは、玄寶僧都
が、池の水に、天水の水にね、自分の姿を映しながら、自
画像を刻まれたんだと。そして、この像、玄寶さん自作
の像であるという伝えが、残っているんです。

(事例４)は、松林寺に所蔵されている玄寶剣像木像、
玄寶が池の水に自らの姿を刻んだ自作の像と
伝えられているという語りである。この木像、先に引用
した「上野郡誌」に沼田顕順氏が、上野に玄寶僧都の木像
が安置していたが虫や鼠にやられていた木像の一輪が
既に欠けていた（「上野郡秘書の木像を安ずず、昔だ
古昔あり、某魂無里魂、有松の本指一輪も欠けに。」）と
報告したものである。「高尾市史」はこの木像について、
松林寺に祀られる玄寶僧都の像は楠材の座像で、全面布貼で革
飾を施し装飾としている。頭部と両手手足は白金色とな
り、指先が一部欠落し、右袖と左腕のわきの部分が消失し
て布貼が見えている。像高五十七センチメートル、長尾二
センチメートル、肩幅三六センチメートル、膝荷五十六セン
チメートル、眼は玉絹をはめ込み、鼻は暗赤色をほどこし
ていると思われる。顔は白色重厚、衣は黒色、装飾は褐色
で、手に印を結び、枝の上に結び締め結っている。」と
記している。現在も同様な状態で、松林寺に所蔵されてい
る。

(事例５)「玄寶の湯」
この近似へ、来るられたのが、実際いつ頃なんか、ちょっと
はっきりわかりませんが、あそこだけつくってね。そ
して、たかこうこの、出てくる水を見てね。
「普通の水とは違うだろう」ということですから、その
水を、色々なて、こう、飲んでみたって、あるいは、そ
のときを、いうものを使ってみると、どうもこれは普通
の水とは違って、色んな、成分を含んだ、いわゆる、温泉
の素の水だと、いうようなことを考えたんでしょう。そこで、その水をですね、とて、風呂場を作られた。そうして、その地域の人たちに、健康のために、あるいは身体が弱っている人たちに、「ここへ来て、ここへてつがれ」というようなことを、言われた。

（事例 6）「玄暦の湯について」

本堂収蔵室になるんですのであそこですね、それで一番こちらから、上がって行く、正面からでなしに横から、車が上がって行くところがある。上が上がり車の所にね、だいたいこう、昔から、小さい、池があったんです。その池の、そばにね、池の、端っこに、浴室が、要するに風呂場が建ててあったんです。それが「玄暦の湯」っていうんだ。だから、冷泉ですね。今から、本堂の正面に入っ行く、左側でですから、要するに本堂に並んだ所ですね、入るかいけ。池のゆうのは、そのお風呂場の、そばにね、池を作って、その、温泉の湯につきながら、池の底を探るとなお、そういうよう、形だった。それは私たちは子どもから知ってますからね。今はどうしてるかあ。[略]

昔はいまだにね、風呂も、かなり、最近ね、あちこち、いわゆる温泉でいうのがあちこちでたじゃない。ほとんどそういう所みたいな歩みますけれど。当時はね、もうこの田舎はみな、車のままだい時代ですからね、みんな身体の調子が悪いとか脚が痛くなったというも、玄暦の湯へ行って、自分たちで、風呂をかわけて、ただで、もちろん、入るかいないということで、ずいぶんと利用者があったんです。

「よう続きますよ」とうかってから、年寄りはね、ちょっとここ行ってからね。「脚が痛くなった、すね（膝）が痛いんです」とか、「腰が痛い」という会そこで行って。

（わき水はまだ）出てると思う。ああ今水道が全部通っているですからね、ほとんど、もう、必要ないでしょう。

ただね、洗澡物なんかは特殊な色が付きますから、そういうもあっただけ、飲むこともちょっと、どうかと感じます。やっぱり、白いものを洗うわけにもいえないし、いわゆる温泉の成分を、持った水というということ。

（事例 5）は玄暦が松林寺のある地に草薙を結び、そこにわく健康に良い水を利用し風呂場を作り地域の人たちに受け入れるという語りです。このわき水は、江戸時代末期から知られており、「山の水」のことのように、戦後しばらくまで、この「玄暦の湯」に入るために人々がやっていったということであった。（事例 6）は大正十五年生まれの話者が子どもの頃（昭和初期頃）には、身体の調子が悪い人たちが玄暦の湯へ行って、自分たちで風呂をかかわり無料で入浴していたという実話である。温泉の成分を持った水であるが、茶色の水なので、タオルをつけようと茶色になり、洗濯物や洗い物には適さない感じがするということであった。この玄暦の湯について、先に引用した「上見方廃寺記」で沼田頼顕氏は、建物の後ろに玄暦が自らうがって水を飲み和歌を詠んだという山の井の水と称する泉がありが、まわりの樹木は伐採され、泉の水もわかかっている（「屋根に石梁あり、即ち玄暦が自ら収め、飲み且つ和歌を詠むさせににして、所謂山の井の水と称するものあり者き樹木に伐り、泉も亦崩し朽くせんとす」）と報告している。大正十五年に松林寺から刊行された宮田正順氏の「僧侶玄暦僧侶の」の項には、「僧侶の歌に、「浅くともよやも淡い漁人もあらし、我れにこそたる山之水」という歌に少しでも水をいたくさに来る者もある。実際にさらゆる風女不思議である」と記されている。大正十五年生まれの（事例 6）の話者より前の世代の人たちは、この水を雲泉の水として飲んでいたことが記され、興味深い。宮田正順氏によると、これらの他に近隠の玄暦谷における玄暦の伝説として、「御自作地蔵尊（地蔵菩薩を像）伝玄暦自作」「玄暦の岩（玄暦が行をした大岩で雲泉の側にあった現在なし）」「恵明の松（玄暦ゆかりの松で現在なし）」などがあったという。

僧侶中国における玄暦の伝説を考える際、近隠の玄暦谷の伝説群は、湯川川周辺の伝説群とともに、重要な問題を多くの含んでいるといえよう。

Ⅱ 吉備中央町の袈裟掛岩と僧侶川

岡山県加賀郡吉備中央町上竹には玄暦僧侶に関する二つの地名由来伝説が伝えられている。一つは地名「袈裟掛」、もう一つは地名「僧侶」である。

まず、地名「袈裟掛」について検討してみることにする。（なお、袈裟掛の表記には「袈裟掛」と「袈裟掛」の二つがあるが、土地では通常「袈裟掛」を使うので、本稿でも原則として「袈裟掛」という表記を使うこととした）。

大正四年に刊行された「上竹荘村誌」第二十章吉備の「三、袈裟掛の項には「延命中高僧玄暦此ノ地を Maharaj T (マハラジャト) 訳ギテ大石ニカケ哲侶哲侶ヲ言ヒス即チ名ノ残 ろもその岩、草ノ急ニ今尚存セリ石面ニ条痕アリ」（4）と記されている。つまり、この「袈裟掛の項」では、延命中に高僧玄暦が此の地にて袈裟を脱いで大石に掛け少しの剣掛してその体をなぐられるとから袈裟掛（掛）の地名が残ったことと、僧侶が今もその大石が残っておりその表面に条痕があることを述べているわけである。現在も吉備中央町上竹に袈裟掛という小字があり、その地区には袈裟掛岩と称される大石が残っている。次に土地で採集した事例を示す。
備中国における玄亀僧都伝説の諸相

〈事例7〉「玄亀僧都の袈裟掛岩」

これは玄亀僧都さんが、あこらかへを通過したらかよからかが、休んだ休み石さんがあるときに、お坊さんですよから袈裟掛っとっていたんです。それよしてみて休んだかた、どうと
か、うのようなことで、袈裟掛石さんがあんなんでしょう。私は見ただったなんです。

〈事例7〉は上竹で採集した話で、玄亀僧都が袈裟を掛けて休んだかたがいる時間が、その石自体は見たことがないという話である（この話は袈裟掛地区より少し離れた地区に居住）。袈裟掛る話は上竹地区ではよく知られており、〈事例7〉の話者のようにその石を見たことがないのも大いに珍しい話である。

〈事例8〉「玄亀の袈裟掛岩と足跡石」

落ち着かず、とこごく通られた時に、ここで休まれたと、
せでそのまあの、袈裟を掛けてここで休まれたいしも、
そして、その辺が、その辺が、これが、流れを受けて、袈裟掛について、玄亀、玄亀さん。せで、私が子どもの時分じゃないかな、昔、山伏いたもんがおっ희ました。へんで、
「何で袈裟掛が、ここは言うんだや」言うた。

「そうかいというか、昔の、弘法大師じゃないけど、そ
れぞれのそ、玄亀さん、これが、ここで休まれて、袈裟、掛
られた岩さんがあるなんか」。

パソコンからその岩を見せてくださいという話で、そこでお五百
経をあげて打ち合わせたところ、「ああわかりました」と
ました。こうい上げられたんですということのは、その辺が、
袈裟掛けた形があって言うんでしょうか。「ああ、これは、こ
れがそうです」と。

へてから、ちょうどここから、七、八百メートルほど、高
葉を出る昔の旧道の、道のほりにねお、このぐらいの岩
がありました。その辺が、その辺が、足跡がないのし、足跡じょう
てでちょうどほんとう足跡が、この辺が、その辺が、岩あったんです。その岩で今みえてますけど、私は子ども時
分に「あのこの石じゃ。そうやあ、ちょっとな、これの、足跡
の跡がつもうにある」。想がち（付）いにとって、このぐらいの
深い（五センチくらい）の、穴がいくつかたました。ああこの岩じゃないかって見て、見てあるんですけど
と、はい。

〈事例8〉は上竹の小字袈裟掛で採集した話で、玄亀が
袈裟を掛けて休んだという話であることと、袈裟掛岩から
少し離れた所に玄亀の足跡石があったということを語っ
ている。大正十五年生の（事例8）の話者が十歳ぐらい
の頃（昭和初期頃か）、話者の家に山伏が泊まったこと
があり、その山伏十歳ぐらいだった話者が袈裟掛岩をめ
ぐって会話をしたといい。その時の記憶が強く残っている
ようであった。その山伏が、玄亀が袈裟を掛けた跡がこれ
のようなと岩を示しながら述べたようである。先に引用し
た「上竹荘村誌」「袈裟懸の項に「石面ニ条痕ニアリ」と
記されているが、この記述も、玄亀が袈裟を掛けた跡（条
痕、すじめ）が残っているようにという意味で記されたも
のとみられる。現在の袈裟掛の表面にも、刻まれたよう
な線が残っているので、そのことだと思われる。

〈事例8〉の後半には玄亀僧都の足跡石があったことが
語られている。〈事例8〉の話者によると、袈裟掛岩から
西南方に七、八百メートルほど離れて、高葉へ出る昔の
旧道（三尺九十センチ）くらいの道幅があったという。

足跡石は、神、英雄、賢人などの足跡がつくってくばんで
いるという話の伝説で全国に多数分布しているが、玄亀
僧都の足跡石の伝説は珍しく、興味深いものがある。

〈事例8〉の話者は子どもの頃その足跡石を見たということであつたが、残念なことに、現在はなくなっているのではないかということがあった。

次に、地名「僧都」について検討してみるとする。大
正四年刊「上竹荘村誌」第二章古証の「四十三、僧都」の
項に「田中ニ裏、玄亀僧都尼時留マリ給ヒ地ニテニテ
僧都トヨイ飲茶川アリ、僧都川トヨイ藝集ニ巡リ巡スルニ
清浄水力ト、御名玄亀ハ平元年僧遺上郡上中郡水田村小殿
ニルトェト後、奈良興福寺ノ僧ニクイ楽ヲ受ケ其楽ヲ
極ム速ニ僧都トナル、（略）三輪山ノ仏小壇ヲ結ヒ住
メリ、（略）諸国ヲ行腳シテ後ニ伯州、西伯郡法勝寺ニ止
ル（略）阿爾都草間村法山湯川寺ニ道ヲ、（略）従賀郡
近似村ニ草壇ヲ結ヒて開居セシ其時竹庄ニ進ル何れ
地ニ暫ヲ留マセ給ヘルナリ、弘仁九年九月廿八九月ノ
と記されている。

つまり、この「僧都」の項では、田中という所にあり、玄
亀僧都が一時留まれた地で名を僧都といい、清浄な水
の出る僧都川があると述べ、そもそも玄亀は僧遺上中郡
上水田村小殿の生まれといい、興福寺の僧について学びて僧
都となり、三輪山の麓に小壇を結んで住んだり、諸國行腳
して伯耆国西伯郡法勝寺に滞在したり、阿爾都草間村法山
湯川寺に退隠したり、川上郡近似村に草壇を結んで開
居した時にこの竹庄の地にしばしく留まられたが、弘仁九
年九月に亡くなったと述べていることがわかる。

次に、土地で採集した事例を示す。

〈事例9〉「僧都の地名由来」

僧都は、僧都郵便局がなかったなんじゃ
いか、玄亀僧都、一時ちょっと停まったことがあるとい
うように聞いたとす。いつ頃の時代が知らんんですけ
と、で、まあ、有名な、高名な方もうなんですか。と言われ
てたという話です。大昔の話ですからわかりませんが、全
部まあ伝え聞いていたんですが、私まで。今の若いなんんか
ほんとうに、知っとるもん少のうなっとるんじゃないかと思うんですだけね。（僧都のこととは子どもの頃から）聞くもります。僕はお坊さんが来て、ちょっと生活したこととか、皆さに、昔のことですから、薬草とかなんとかおんなさんが医療的で、施術やんですか、教えてたかうかうかということはまあ。ようなお坊さんが、ここにはもったいないお坊さんがおったうなゆくらいう話でした。

（例事9）は僧都という地名は玄奘僧都がこの地に一時滞在していたからつけたもので、薬草などの医療的な知識を教えてくれたらしいという話を聞いたという語りである。

（例事10）「僧都川」
僧都川と言ってたか、それは小さい川から言うまいですね。ここでヘんでの数戸、何軒くらいになりますかな、まあ私は一部、三軒が四戸くらい、飲料水を使ってました。専用ではありませんからてもんといますが、ちょっと深い川が深い川見たくて見たくて、へんでそういう川でね、水の出し方とか水の出し方があるとか、水の出し方とか、というような使い方がでした。

（例事10）は僧都川または僧都と称されているわき水についての語りである。この僧都川の周辺地に僧都という字地がある。この地で、玄奘僧都がこの僧都という字地に草薬を結んで一時滞在した時にこの水を飲まれたのではと仮定されているようである。水道を使うようにすると、僧都川周辺の数戸が共同で水を使っていたそうで、泥をくずくなどとして常にきれいに掃除していたという。僧都川は北側の小さい川と南側の大きい川があり、源の北の小さい川は飲用に、その水をためた水がについては未だ、トマトやイカを冷やして食べたりしていたそうである。現在、北の小さい川にはポンプが設置されている。

（例事11）「近似から来た玄奘」
あのね、あのの、僕らが話に聞いた時分、これは高架から聞いたんですけど。こっから、高架の玄奘さんいうところがあって、そこでなんか四、五年滞在されたとんじゃなかかいといって、お寺を建ててどこへおられるのを聞いたことがある。ここから、あそこへか行かて、読んで、ちゅうど、高架の方の橋の橋から、なは、七、八メートル、五百。（高架）中学校がありますが、あぼのまこと

上のごところへんくらいに、お寺があります。玄奘僧都さんて

上のことは、黒くから東からこっち東から、東の方からこっち来られたということを聞いたとなります。裂開掛岩、裂開掛岩という。

（例事11）は高槻市落合町近似の玄奘寺に玄奘が四、五年滞在していた頃、そこから裂開掛岩のあるこの地に来られたということを聞いたという語りである。先にみた「上竹葉村名」、「僧都」の項に「上川当近似木村草薬サブヒドレノサイクル時代草薬ニ進ボハルハリ Generis 二進ニ進ボハルハラセ給ヘル」などと記されていたが、その記述と「例事11」の語りの内容が共通していることがわかる。

（例事11）の話者は高槻市落合町近似にある寺を上竹の入るちは一般的に玄奘寺と呼ぶとされています。「川上近似村（高槻市落合町近似）に玄奘が草薬を持った所に松林寺が建てられて伝えられているわけではないが、本籍前記（例事2）にみたように、松林寺のことを周辺地に「玄奘」と呼んでいる。「玄奘」という呼称について落合町近似地区の古老に聞いたところ、かつて松林寺の近くで「玄奘」という宴会場が営まれていたことがあったそうである。その宴会場の名前は松院の影響によるものであることがわかった。吉備中央郡上竹で江戸十五年に生まれた（例事11）の話者も、上竹で昭和三十年に生まれた（例事9）の話者も、松林寺のことを「玄奘」と呼び松林寺の名を知らなかったから、高槻市の近隣地では松林寺のことを「玄奘」と呼んでいたことがあったらしいことがうかがえ、文化史的にも興味深い。

III 玄奘僧都伝承の広がり
僧中国の玄奘僧都伝承は、寺院開基伝承や滞在伝承のほかに、文脈に関係するものにまで広がっていることがうかがえる。

岡山県高槻市跡町家様七九二・九番地にある福徳山山王院千柱寺は、寺伝によれば、推古天皇の御代（五二二～六八二年）に善隠大師が開創した。弘仁年間（八一〇～八二四）に開創が中絶し、火災後の元亀年間（一五七～一五七三）に山頂から現在地に移転したという。真言宗御室派に属し、主尊は観音大士である。玄奘とのかかわりは、後代に寄附されたという伝玄奘僧都の大般若経九十三巻があるという点である。僧都と直接的な関係はないが、間接的にはかかわっていると、本財も取っている。

この伝玄奘僧都の大般若経に関しては、大正三年に刊行された「上房記話」に記述があるので、引用しておく。

○「上房記話」「千柱寺の事」
仏僧／大般若経九十三巻／当山縁起に弘仁の頃、玄奘僧都巡録の際、該当部分百五十巻書きمب備中皆部の地頭藤原応定家の家に永く伝なり、後当家に寄付せり、而して文録（繁字）年中の火災に罹り、六百帳の内僅かに九十三巻焼
残りと云ふ。然しその経を見るに玄宗寺等の写名は見えずして、経の奥書に建博五年三月二日書葉筆頭主掌大長使藤原奈長が建協照薬師造應当院同土光院書承順脇書字名に知令繕写等混ぜて置、諸経破損の箇所を解録す所を示せぬ。然れれば右本は破損修復の補写ならばと云える。逆に角当寺には後期と繋げると云ふ所以を保存せり。

この『上房経跡』の記述によれば、弘仁の頃に玄宗寺大般若経全六百巻を書写したものが編集所の地頭藤原知定の家に永く伝わっていたが、後に千柱寺に寄付された。しかし、文徳年中の大火災によって六百巻の大半が焼かれて、焼け残った九十三巻が今に伝わっているということである。

興味深いのは、この文章を記した人物が焼け残った大般若経九十三巻を調べたところ、玄宗の名は見えず、経の奥書に「建保五年三月二日書葉筆頭主掌大長使藤原奈長が建協照薬師造應当院同土光院書承順脇書字名に知令繕写等混ぜて置、諸経破損の箇所を解録す所を示せぬ。然れれば右本は破損修復の補写ならばと云える。逆に角当寺には後期と繋げると云ふ所以を保存せり。」の記載があるという部分である。この奥書には、四部記録の中にある藤原知定の家に伝わっていたと思われる。また、『仏教史論』という記録から、知定が書作業時のものか、修補作業時ものかは不明であるが、奥書の記述からみれば書作業時ものである可能性が高いと思われる。奥書が書作業時のものであった場合でも、玄宗が破損に隠蔽した『湯川寺の興隆』という人物が居座っていることから、建保五年の大般若経書作業は、湯川寺の玄宗伝承と何かの関係があったものと推定される。

さらに興味深いのが、『哲部』の地主の家に永く伝玄宗自筆大般若経が伝えられていったという伝承である。『哲部郷・康部広』は長楽寺（旧北房町）上町上、下町部に近い所に在っている。哲部は玄宗生誕地伝説のある旧北房町上水田小殿の近辺であり、哲部に住む有力者の家に永く伝玄宗自筆大般若経が伝えられていった伝承が多々あるため、自然とつながって見ることが出来た。

長楽山長楽寺（旧北房町）四野八番地にある光明山長楽寺は、寺伝によれば、推古天皇の御供券の一部（九五二六年二八箇所）に記載された寺の一つで、弘仁七年（一九八八年）に国藤吉が開基したという。建久六年（一九八八年）に国松任の命により国藤吉が建立したというが、その後、数度も火灾にあっては再建されたという。真言宗御室派に属し、本尊は千手観音である。玄宗とのかかわりは、伝玄宗作の「聖徳太子像」立像があるという点である。玄宗関係伝説のある寺院ではないが、間接的にはかかわりがあるため、本題に取り上げた。

江戸時代半期の嘉永七年（一八五四年）に改築された『関東造大縁起』には、「水田」の所の光明山長楽寺／鏡倉右大将建立／藤原景時奉行」と記しており、経院の右上に飾ってある「古剣」の項（三角寺の名がある）にも「関東寺同（英薬院）水田」とある。このことから、江戸時代半期には関東寺は湯川寺や四王寺ともに数少ない「古剣」の一つと認識されていたことがわかる。

『北房町史』巻二編上には「関東関係起」によると玄宗が関東に隠棲していたころ、空海は英薬院西方村の定光寺、同院草創期の湯川寺に見舞いを訪れた。英薬院水田（現北房町水田）の関東寺で空海は本尊千手観音立像と不動明王座像を讃え、玄宗は聖徳太子像を讃えという親密な間であったという。』と記されている。関東寺周辺の玄宗にわたる伝承としては、「玄宗と聖徳太子立像」（玄宗がそうだった、「玄宗と京師が谷」（玄宗が新田付近の谷を通った時、遙か遠い手を出して「京師が見えた」と高く上げたことにより京師が谷という地名となった）などがある。

関東寺に空海と玄宗の交流伝説が生じたのは、関東寺に空海再興伝説があることに加え、「英薬院水田（旧北房町宮地）」という関東寺の位置が、玄宗が隠棲した湯川寺と距離的に近いという点が関係しているものと考えられる。さらに、関東寺は、玄宗生誕地伝説のある旧北房町上水田小殿や、玄宗の母が隠居したという高麗寺（旧上房）、有線町の郭石寺や、地図上の永く伝玄宗自筆大般若経が伝えられていた伝承のある旧北房町哲部の近所にある。関東寺にわたる伝承は、旧北房町上水田殿寺周辺を中心とする玄宗生誕地伝承国に属するとみてよいように思われる。

IV 「哲部郷」の意味するもの
玄宗が編著関東寺に隠棲したことはよく知られている。湯川寺は関東のどこかにあるのである。平安時代以降、関東寺の所在地は一貫して「哲部郷」と考えられていたようである。進むべきになるが、現在の伝承文献を引用すると次のようになる（傍線・波線を付加した）。
A 「畳積図記」（八九二年成立）弘仁七年条……「弘仁七年八月発。勅。玄宗和尚。住聡中野多露。苦行行日。利益可。宜法師在住之間。彼旧慶者応来進。以所費文。」（『新編増補国史大系』）。
「畳積図記」の記述からは弘仁七年（八一八）に玄宗が「関東哲部多露」に住んでいたことがわかる。しかし、玄宗が生存在している間、哲部多露の税金を軽減するようにとの勅許が出されていることから、哲部多露の玄宗の活動の度
合いはかなり大きなものであったと推定される。しかし、寺名は不明である。

B 興福寺本『僧続補任』（平安時代成立か）弘仁五年の大僧都玄奘の項……「逝去在僧圆通山寺」（「大日本仏教全書－二三」）。

興福寺本『僧続補任』の記述から弘仁五年（七八四）に玄奘が大僧都を辞して「僧行謂山寺」と断定したことがわかる。しかし、この記述からは、湯川寺が僧中国の何郡にあったかは不明である。

C 興福寺本『僧続補任卷一／裏書』（裏書記入期不明）……「玄奘僧　逝去職　去本寺　鶴　居廻住僧哲多喜　湯川寺　」（「大日本仏教全書－二三」）。

興福寺本『僧続補任卷一／裏書』では「僧中国哲多喜湯川寺」とあり、裏書記入者が湯川寺が僧中国哲多喜にあったと認識していたことがわかる。

D 「南都高僧伝」（十三世紀頃成立）玄奘の項……「逝去、所在国僧圓通山寺。云々。弘仁五年甲午令今年言　僧職龍居本寺僧中国（哲）多喜寺。」（「大日本仏教全書－一○」）。

「南都高僧伝」は「僧中国湯川山寺」「僧僧圓通山寺　僧　哲　多喜寺」と記していることから、湯川寺は僧中国（哲）多喜郡にあったと認識していたらしいことがうかがえる。

E 「元亨記書」（一三二二年成立）玄奘の項……「大僧都職下　僧職　僧圓通山寺　」（「大日本仏教全書－一○」）。

「元亨記書」では「僧中国湯川寺」に断定したとしているが、この記述からは湯川寺が僧中国の何郡にあったのかは不明である。

備中国における玄奘僧都伝説の諸相

実入寺の「実入僧都末像」や「実入の湯」などの伝説を採集することができた。

備中国の玄奘僧都伝説は、地名として「松原」と「齏原院」と「足跡岩」の伝説や、地名「僧都」と「僧都川」の伝説が伝えられている。

その他の、備中国の玄奘僧都伝承は、寺院開基伝承や地名伝説のほかに、物語に関連するものまで広がっていることがうかがえた。

玄奘は備中国湯川寺に隠退したことや、実には僧都寺に住んでいたことなどが、文献で確認できる備中国にある寺には、湯川寺だけであるが、単に湯川寺を「僧都寺」と呼んだとされるところである。ところが、湯川寺は実際には松原寺があり、では「僧都寺」の寺号はどこかということになる。その「僧都寺」の寺号であった可能性を持つのが大長寺・大本寺ということができる。地名伝説に記載がない寺は、可能性を指摘するしかないが、旧興願寺は大長寺・大本寺として伝承の存在は、極めて重大な意味を持つ可能性を含んでおり、さらなる研究の深さが期待される。

注・文献

[木箱における諸資料よりの引用文]、旧漢字・異体字は原則として通行の字形に改めた。]

1) 壽田本『僧侶養成』弘仁五年の項に、大僧都の玄奘が「遠去住備中国湯川寺山」（『大日本仏教全書』一二三）にある。

2) 原田信之『備中国湯川寺における玄奘伝説』（『新見女子短期大学紀要 第一巻』一九九六・一二）、『備中国における玄奘伝説地伝説』（『研究日本文学 第七巻』号二○三・一二）、『備中国における玄奘伝説地伝説』（『日本文学 第五巻』号二〇四・三）、『湯川寺伝説と僧都僧伝説』（『日本文学 第四巻』号二〇五・四）、「備中国新市市の高僧僧都伝説」（『新見公建立大学紀要 第二巻』号二〇二・一二）、『備中国新市市の高僧僧都伝説』（『日本文学 第二巻』号二〇二・一二）。参照。

3) 「曹源宗岡山寺宸陵世代名冊」（曹源宗岡山寺宗務所、一九九八）、『松原寺』、「高僧僧都伝説」の項。

4) 新見市御殿町センター蔵「備中国巡覧大絵図」によた。

5) 「備中誌」（日本文書出版株式会社、一九九二・二巻発行）、一九七七巻、一八八〇・一八八一页。
32) 33)『北房町史 通史編上』（北房町・一九九二）、三一八頁。
34) 興福寺所蔵『僧緒補任卷一裏書』（奈良文化財研究所
撮影カラー写真によた）には「玄寛辞退両職、去本寺。
籠屋僧中興多郡湯川山寺、律師辞退歌云。三輪川ノ清
き浄ヲ洗テシ夜ノ袂ハ更ニ不織シ、大僧都辞退歌云。外
国ハ山清水清シ事多キ君カ都ハ不住スマサレリ」と記され
ている。
35) 大野達之助編『日本仏教史辞典』（東京堂出版・一九
七九）、「玄寛」の項。
36) 『朝日 日本歴史人物事典』（朝日新聞社・一九九四）
「玄寛」の項（岡野浩二氏執筆）。
37) 注29の「岡山県の地名」、「備中国」の項。